

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 24 日現在

機関番号：37409

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2023

課題番号：20K22172

研究課題名（和文）日本における移民の生活戦術と社会統合 同化論再検討

研究課題名（英文）Survival Tactics by and Social Integration of Immigrants in Japanese Society:
Reexamination of Assimilation Theories

研究代表者

伊吹 唯 (Ibuki, Yui)

熊本保健科学大学・保健科学部・講師

研究者番号：00880189

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本において移民の同化についての研究が不足していることをふまえ、地域社会における移民受け入れの論理と移民の同化戦術の相互作用に着目し、日本の地域社会における移民の統合の様相を明らかにすることを目的としてきた。研究の成果としては、主に、日本にルーツを持つエスニック帰還移民（日系帰還移民）の同化戦術の分析枠組みを構築し、日系帰還移民と他のエスニック帰還移民との比較を行い、従来調査してきた長野県Y市における日系帰還移民の位置づけを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本社会に暮らすニューカマー移民の研究は、移民受け入れ社会の構造に踏み込んだ議論や理論的研究が不足すると指摘されてきた。本研究は、移民の同化についての理論化の第一歩として、日本の移民研究の理論的發展に貢献したと考える。加えて、現在の移民について、歴史的視点を取り入れた研究を行う必要性を示した点は、移民史研究と移民研究の接続に貢献した。また、本研究は、移民受け入れ現場の担当者への聞き取りや移民当事者へのインタビューを含む調査を実施しており、現場の視点に根差した理論は、今後、日本社会や地域社会の統合政策の形成に対しても貢献しうるものである。

研究成果の概要（英文）：This study, based on the lack of research on immigrant assimilation in Japan, aims to clarify the aspects of immigrant integration in Japanese local communities by focusing on the interaction between the logic of immigrant acceptance in local communities and the assimilation tactics of immigrants. The main outcomes of the research include:

1. Establishing an analytical framework for the assimilation tactics of ethnic return migrants with Japanese roots (Nikkei return migrants), 2. Comparing Nikkei return migrants with other ethnic return migrants, and 3. Clarifying the positioning of Nikkei return migrants in Y City, Nagano Prefecture.

研究分野：移民研究

キーワード：エスニック帰還移民 社会統合 生活戦術

1. 研究開始当初の背景

エスニック・マイノリティの権利保障を目指す多文化主義は、1970年代に登場した (Kymlicka 2007)。日本でも1990年代以降、地方自治体が、多様性を尊重する「多文化共生社会」を目指す政策を始めた (山脇 2009 など)。他方、国民国家の社会統合の論理は、理念や市民権を共有する同質的な人々を求める (Brubaker 1992、Schnapper 2003 など)。

このような背景を踏まえ、報告者はこれまで、長野県 Y 市を事例に、「日本人」の子孫であるために入国・滞在を許可された中国帰国者や日系ブラジル人 (日系帰還移民) が、地域社会において「日本人」として受け入れられるために同化戦術を用いることを明らかにした。さらに、神奈川県 X 団地における調査や、先行研究による在日コリアン (福岡 1993) や欧米の事例 (García 2014、Dietz 2006 など) も加え、表 1 のような仮説的枠組みを作成した。すなわち、移民による同化戦術の有無の規定要因として、移民のバックグラウンド (表 1 の i) とホスト社会の統合の論理 (表 1 の ii) の相互作用があることを明らかにした。

表 1: 移民の同化戦術の規定要因の理念型 (申請者作成)

		i 移民の バックグラウンド	ii ホスト社会の 統合の論理	同化戦術の 有無
日本	日本社会 全般	在日コリアン = 旧植民地出身者	同化しなければ 排除	○
	X 団地	インドシナ難民 = 帰国困難	多文化共生の モデル地域	×
	長野県 Y 市	エスニック移民 = 「日本人」の子孫	「日本人」としての 受け入れ	○
ドイツ (冷戦体制崩壊後)		アウスジードラー = 「ドイツ人」の子孫	受け入れ 政策の縮小	×
アメリカ		非正規メキシコ移民	強制送還	○

2. 研究の目的

以上の背景をふまえ、移民による同化戦術の選択とその位置づけの検討により、日本の地域社会における移民統合の論理をより詳細に明らかにすることが、本研究の目的である。1965 年以降アメリカに流入した移民を調査した Alba & Nee (2003) や Jiménez (2017) は、ホスト社会も移民との相互作用のなかで変化すると指摘した。このように、移民とホスト社会は相互規定的である。本研究では、移民とホスト社会が相互に影響しあうなかで、移民が同化を戦術とする背景にホスト社会のどのような統合の論理があるのかを明らかにしたい。

以上をふまえ、本研究では、エスニック帰還移民に限らないより広範囲の移民を対象とし、日本の地域社会においてかれらが同化をどのように位置づけ、その背景に地域社会によるどのような統合の論理があるのかという問いを立てる。

3. 研究の方法

本研究では、I) 長野県 Y 市、II) 神奈川県いちょう団地、III) 熊本県 W 市でのフィールドワークを行う (具体的な調査方法は表 2)。申請者は、I) と II) において本研究開始以前から調査を行ってきたが、対象とする移民の範囲を広げ、かつ、地域性の異なる III) をフィールドに加えることで、表 1 で示した枠組みの精緻化を図る。

3 都市は、中国帰国者受け入れ経験を持つという共通点を持つ一方、地方都市、首都圏郊外都市、地方中核都市という違いを持つ。そのことは、就業構造や移民受け入れ経験の違い (日系ブラジル人やフィリピン人などの「ニューカマー」多住地域、インドシナ難民集住地域、技能実習生急増地域という違い) にも関係する。このような違いが地域社会の統合の論理に与える影響もふまえて分析を行う。

【表 2: 調査方法と明らかにする内容】

調査方法	明らかにする内容	移民の戦術	地域社会の統合の論理
A) 移民へのライフストーリー・インタビュー		◎	○ (移民の視点から)
B) 参与観察 (日本語教室、国際交流イベントなど)		○	○
C) 行政担当者への聞き取り		×	◎
D) 資料分析 (行政資料、統計、地方紙新聞記事など)		○	◎

◎: 「よく明らかになる」、○: 「明らかになる」、×: 「明らかにならない」

4. 研究成果

本研究の研究期間を開始した2020年度からは、新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、フィールドワークの実施が困難であった。そのため、研究申請時の計画からの変更が必要となり、神奈川県 X 団地における調査を実施することができなかった。また、長野県 Y 市や熊本県 W 市における調査も、当初の計画より回数や期間を大幅に減らしての実施となった。しかしながら、そのなかでも、研究成果として以下の3点が主に挙げられる。

移民の同化戦術の分析枠組みの構築

本研究は、日本社会における移民の社会統合の論理を、同化戦術に着目して明らかにすることを目的としていた。そのため、まずは同化論の整理と日本社会の事例に援用するための理論的フレームワークの構築を試みた。

アメリカにおいては、特に1980年代後半以降に再興した「新同化論」のなかで、移民がホスト社会の様々な階層に分かれて同化することや、移民とホスト社会の相互作用のなかで移民が社会上昇のために同化を選択することなどが明らかにされてきた(例えば、Portes and Rumbaut 2001、Alba & Nee 2003 など)。

本研究では、日本の地域社会における移民の同化戦術を明らかにするため、これらの研究を整理し、移民の持つ資源などの「同化可能性」だけではなく「同化必要性」にも着目することで、移民の同化戦術を明らかにする枠組みを示した。

従来、在日移民の研究は、理論的な研究の不足が指摘されてきた(樋口 2006)ことから、本研究は、在日移民研究に対して、理論的側面から貢献することができたと考える。他方で、この枠組みの妥当性の実証的な検討は、今後の課題としたい。

日系帰還移民とエスニック帰還移民の比較

本研究の申請時に仮説的に作成した「移民の同化戦術の規定要因の理念型」(表1)の検証のため、同じエスニック帰還移民である中国帰国者とドイツのアウスジードラーの比較を行った。特に、中国帰国者とアウスジードラーは、それぞれ、第二次世界大戦の敗戦国である日本とドイツへの「帰還」であることから、その背景などに類似性が見られ、両者を比較することでエスニック帰還移民研究にも中国帰国者研究にも新たな知見を与えることが可能である。しかしながら、エスニック帰還移民研究においても中国帰国者を事例とした研究は見られず、中国帰国者研究においてもエスニック帰還移民研究の視点からの研究は管見の限り見られない。そこで、本研究では中国帰国者とアウスジードラーの受け入れ政策について、比較を行った。

先行研究において論じられてきた中国帰国者とアウスジードラーの受け入れ政策の検討からは、冷戦は中国帰国者の「帰還」を阻む要因の一つであったのに対し、アウスジードラーの場合には、冷戦がかねらの「帰還」をむしろ促進する要因であったことが明らかになった。すなわち、中国帰国者とアウスジードラーの受け入れ政策の比較からは、どちらも、敗戦国への国際社会が冷戦に突入り東西対立が深まっていくなかでの「帰還」だったにもかかわらず、冷戦は両者に全く異なる影響を与えたことが明らかになった。

中国帰国者研究は、従来、中国帰国者を他の移民と比較することをしなかつた。この背景には、中国帰国者一世の当事者が自分たちを「日本人」として位置づけるため、当事者との関係が強い研究者ほど、かれらを「移民」として位置づけることに抵抗があったためではないかと考えられる。しかしながら、中国帰国者にルーツを持つ人々のなかにも三世や四世も増え、近年、日本生まれの中国帰国者の子どもたちを日本生まれの中国系移民の子どもたちと同じ枠組みで調査・分析を行う研究も見られるようになってきている(例:坪田 2021 など)。本研究は、このような近年の傾向をふまえ、中国帰国者和其他の移民やエスニック帰還移民の比較研究を行うことで、中国帰国者を他の移民やエスニック帰還移民のなかで相対化することに貢献するものである。他方で、従来中国帰国者を事例として扱ってこなかったエスニック帰還移民研究に対しても、中国帰国者の事例から新たな視点を提供することが可能と考える。今後も、中国帰国者とアウスジードラーの政策的な面以外(生活面や社会統合の側面など)についての比較や他のエスニック帰還移民との比較を継続していきたい。

長野県 Y 市における日系帰還移民の位置づけ

以前から調査を行ってきた長野県 Y 市は、旧「満洲国」への移民(満洲移民)を多く送出した地域であり、中国帰国者が多く居住することに加え、日系ブラジル人も多く居住してきた地域である。本研究は、エスニック帰還移民において論じられてきた「エスニック・ヒエラルキー」(例:Tsuda 2019)の概念を援用し、この地域においては、満洲移民や中国帰国者との歴史的関係から、現在の中国帰国者と日系ブラジル人の受け入れに際しても、それぞれの位置づけに差異があることを明らかにした。つまり、日本にルーツを持つ日系帰還移民の位置づけにおいて、地域社会において「ヒエラルキー」が存在する。

また、このことから、現代の地域社会における移民の受け入れを検討する際に、その地域が歴史的に持つ移民との関係性にも目を向ける必要性が示唆された。従来、現代の在日移民の研究は出移民史などの移民史研究の知見を活用しきれていないと指摘されたきた(竹沢 2011)が、本研究はその問題を乗り越える示唆を与えるものとなった。

参考文献

- Alba, Richard, and Victor Nee, 2003, *Remaking the American Mainstream: Assimilation and Contemporary Immigration*, Cambridge, Massachusetts, and London: Harvard University Press.
- Brubaker, Rogers, 1992, *Citizenship and Nationhood in France and Germany*, Cambridge: Harvard University Press .
- Dietz, Barbara, 2006, “Aussiedler in Germany: From Smooth Adaptation to Tough Integration,” Leo Lucassen, David, Feldman and Jochen Oltmer eds., *Paths of Integration: Migrants in Western Europe (1880-2004)*, Amsterdam, Amsterdam University Press.
- 福岡安則, 1993, 『在日韓国・朝鮮人 若い世代のアイデンティティ 4版』中央公論社 .
- García, S. Angela, 2014, “Hidden in Plain Sight: How Unauthorised Migrants Strategically Assimilate in Restrictive Localities in California,” *Journal of Ethnic and Migration Studies*, 40 (12): 1895–914.
- 樋口直人, 2006, 「分野別研究動向 (移民・エスニシティ・ナショナリズム) 国際社会学の第2ラウンドに向けて」『社会学評論』57(3): 634-49 .
- Jiménez, Tomas, *The Other Side of Assimilation: How Immigrants Are Changing American Life*, Oakland, California: California University Press.
- Kymlicka, Will, 2007, *Multicultural Odysseys: Navigating the New International Politics of Diversity*, Oxford: Oxford University Press.
- Portes, Alejandro, and Rubén G. Rumbaut, 2001, *Legacies: The Stories of the Immigrant Second Generation*, Berkeley: University of California Press. (村井忠政・房岡光子・大石文朗・山田陽子・新海英史・菊池綾・阿部亮吾・山口博史訳, 2014, 『現代アメリカ移民第二世代の研究 移民排斥と同化主義に代わる「第三の道」』明石書店 .)
- Schnapper, Dominique, 1994=2003, *La communauté des citoyens : sur l'idée moderne de nation*, Gallimard (=中嶋洋平訳, 2015, 『市民の共同体 国民という近代的概念について』法政大学出版局 .)
- 竹沢泰子, 2011, 「移民研究から多文化共生を考える」日本移民学会編『移民研究と多文化共生』, 1-17 .
- 坪田光平, 2021, 「困難経験の異同と階層性 中国系の学校経験」清水睦美・児島明・角替弘規・額賀美紗子・三浦綾希子・坪田光平, 『世界人権問題叢書 103 日本社会の移民第二世代 エスニシティ間比較でとらえる「ニューカマー」の子どもたちの今』明石書店, 263-90 .
- Tsuda, Takeyuki, 2019, “Conclusion: Interrogating Return: Ambivalent Homecomings and Ethnic Hierarchies,” Takeyuki Tsuda and Changzoo Song eds., *Diasporic Returns to the Ethnic Homeland: The Korean Diaspora in Comparative Perspective*, Switzerland: Palgrave Macmillan, 239-54.
- 山脇啓造, 2009, 「多文化共生社会の形成に向けて」『移民政策研究』1: 30-41 .

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 伊吹唯	4. 巻 30
2. 論文標題 移民送出地域における出移民史の継承活動 熊本県の事例からの考察	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 移民研究年報	6. 最初と最後の頁 85-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 伊吹唯	4. 巻 28
2. 論文標題 新刊紹介 清水睦美・児島 明・角替弘規・額賀美紗子・三浦綾希子・坪田光平著 『日本社会の移民第二世代 エスニシティ間比較でとらえる「ニューカマー」の子どもたちの今』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 移民研究年報	6. 最初と最後の頁 140-140
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 蘭信三・李洪章・人見佐知子・福本拓・伊吹唯	4. 巻 15
2. 論文標題 総合討論「可能性としてのインタビュー」（方法としてのインタビュー：ワークショップ）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 コスモポリス	6. 最初と最後の頁 87-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 伊吹唯
2. 発表標題 移民送出地域における移民史の再構築と継承活動 熊本県の事例からの考察
3. 学会等名 日本移民学会第32回年次大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 伊吹唯
2. 発表標題 日本社会における「同化」論の批判的再検討 エスノ・ナショナリズム / 植民地主義との関係から
3. 学会等名 第7回日本移民学会冬季研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 伊吹唯
2. 発表標題 「地域社会によるオーラル・ヒストリーの継承の可能性と限界 『下伊那のなかの満洲』の事例から」
3. 学会等名 日本オーラル・ヒストリー学会第19回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 伊吹唯
2. 発表標題 「同化論の批判的再検討 日本社会における移民の社会統合論に対する視座として」
3. 学会等名 第93回日本社会学会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 伊吹唯
2. 発表標題 「エスニック帰還移民としての中国帰国者 日系ブラジル人・アウスジードラーとの比較から」
3. 学会等名 第96回日本社会学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 伊吹唯
2. 発表標題 「中国帰国者二世・三世にとっての『同化』と社会統合」
3. 学会等名 日本移民学会第33回年次大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------